

---

# colors

湊 翼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

colors

### 【Zコード】

Z5970Y

### 【作者名】

湊 翼

### 【あらすじ】

16歳の誕生日。

美穂奈は政略結婚させられる為に、部屋で軟禁状態にあった。

そこで、毎年誕生日になると現れる不思議な本を見つける。

いつも何も書いてないその本に、今日は金色に光る文字が浮かび上がった。

惹きつけられる様にその文字を手と指で追つた美穂奈は、最後に文字が浮かび上がった瞬間、光に包まれ、気付くと知らない場所に立っていた。……各題名にあまり意味はないです。題名センスない

だけですのでも、あまり気にしないでくれるとありがたいです。

## プロローグ

水狼<sup>ウォルフ</sup>が鳴き、ラズは読んでいた本から視線を上げた。

水狼は気性が荒い方だが、こんな風に鳴く事はあまりない。森で何かあつたのだろうか？

不思議に思い窓の外を見てみるが、特に何もない。首を一度だけ傾げ、ラズは視線を本へと戻した。

緑の革表紙に金の縁取りがある分厚い本。

ページを開けば、そこは真っ白な空白ばかりが続く。だが、ラズはその灰緑色の瞳でそこに何かが書かれているかの様に凝視した。

細く、長い指が、その真っ白いページをそっと撫でると、うつすらと文字が浮かび上がった。

まるで、ラズの指から紡がれているかの様に現れるその文字は、金色に輝きゆっくりと白いページを埋めていく。ゆっくりゆっくりとページを埋め、最後のページでその光はさらりと大きく膨み……。

そして、弾けた。

出来れば今日という日を迎えたくはなかつた。

と、自室に閉じこめられた美穂奈<sup>みほな</sup>は本気でそう思つていた。今日。

そう、美穂奈は今日で16歳になるのだ。

16歳の誕生日、それは今まで行つてきた誕生日とは違う響きを持つ。

「16歳…。嫌な法律よね。」

呟いて、美穂奈はベッドに突つ伏しする。

そう、16歳。

日本では、女は16歳、男は18歳になると親の同意さえあれば結婚が許されるのだ。

そう、親の同意さえあれば、政略結婚させる年齢という訳だ。

「お義父様とお義母様の為だけど…。」

美穂奈はこの家の本当の子ではない。

小さい頃、両親を亡くし、どうする事も出来ずただ呆然と佇んでいた美穂奈を助けたのが、この家の夫婦であった。

だから、美穂奈は、この家に對して凄く恩を感じていた。多少の事なら頑張れる。

勉強も、運動も、礼儀作法だって、一生懸命に頑張った。彼等の期待に応えられるよう、一生懸命に。だけど…。

「結婚かあ…。」

呟いて、思い出す。

なんともつまらないあの婚約者の事を。

そう、あれは初めて顔を合わせて、庭で散歩した時の事だ。彼はこう言った。

「あなたの様な素敵な素敵な人が僕のお嫁さんで本当に良かつたです。あなたとなら、きっと良い家庭を築けると思います。」

と…。

何とも型にはまつた定型文。

庭に出る前に少し「ご趣味は?」「お茶を少々」という、やはり型にはまつたやりとりを少ししただけで、私の一体何がわかると言つのか。

どこをどう見て、何を基準として、私が素敵な人なのか。

そう思つと、吐き気がした。

そして、この人の先が見えてしまつた。

型にはまつた、つまらない結婚生活。

そんなものを強いられ一生生きていくのかと思うと、急に嫌になつたのだ。

「だからと言つて、逃げ出す勇氣などないのだけれど。

固く閉ざされた部屋のドアを見て、美穂奈は自嘲氣味に笑つ。そう、逃げる勇氣なんてないのだ。

なのに、あの両親は一体私がどこに逃げると思ったのだろう。

逃げる場所なんて、どこにもないのに…。

ジッとしてると、時計の音が煩わしく、ゴロンゴロンと無意味にベッドの上で転がる。

「痛つ！」

と、何か固い物にゴツンと頭をぶつけ、美穂奈は転がるのを止め、体を起こした。

無駄にふかふかなこのベッドの上に、一体何なんだと思った私は、ソレを視界にとらえビクリと体を震わせた。

赤い革表紙に、金の縁取りが付いた分厚い本。

「今年も…、なの？」

呟いて、美穂奈はソレにそつと手を伸ばす。

ずつしりとした重みが、掌と心の奥底に刻まれる。

指先でそつと撫でてから、美穂奈は視線を巡らせる。

今、この部屋には自分しかいなく、そして、唯一の出入り口であるドアはやはり固く閉ざされている。

そうすると、やはりこの本は…。

そつと、ページを捲つてみる。

白く眩しいページが、どこまでも続く。

かなり分厚い本だが、さすがに何も書いてないとパラパラと繰るだけで終わり、あつと言う間に最終ページに到達した。

「やっぱり、あの本なのね…。」

何も書いてないからこそ、美穂奈はこの本が毎年見ている物と同じ

だと判断出来た。

何も書かれていない不思議な本。

毎年、美穂奈の誕生日になると突然現れる不気味な本。

「仕方がないわね。」

呟いて、美穂奈はその本をそつと枕元に置いた。

ちなみに、不気味だからと投げ捨てたり燃やしたりしても、いつの間にか戻つてくるので、余計に気味が悪い。

それならば、今日という日が終わるまでどこかその辺に置いておく方が幾分かマシである。

今日が終われば、この本はやはり知らない間に消えているのだから。その時、外から犬の遠吠えが聞こえ、美穂奈は顔を上げた。滅多な事がなければ鳴かない様に躊躇っている番犬が鳴いている。珍しい、泥棒でも入つたのだろうか？

不思議に思い窓の外を見てみるが、特に何もない。

首を一度だけ傾げ、美穂奈は視線を部屋の中へと戻した。瞬間、ビクリと体が震える。

枕元に置いてあつた、あの赤い本が、ひとりでに表紙を開いたのだ。風ではない。

というか、もし風が吹いたとして、革表紙に金の縁取りがあるあの本の表紙を捲る事なんて無理だろう。

「な、何？」

恐る恐る近付くと、真っ白いページが微かに光っている。

目をこらし良く見れば、それは金色に輝く文字、：の様なものだった。

正直読めない。

つまり、日本語と英語ではない。

フランス語でもないとと思う。

：アラビア文字？

最初に抱いた感想は、ソレだった。

模様の様な、でも規則性のある文字の様な、そんな金色に光り輝く

不思議な文字が白いページを埋めていく。

「綺麗…。」

氣味が悪いとか、怖いというよりも先に、そう思った。

金色の光は、小さな光の粒子の様で文字の周りをキラキラと彩る。そつと指を伸ばし、触れてみるが、何もない。

美穂奈の指にその粒子が付くわけでも、感触がするわけでもない。

けれど、美穂奈はなんとなく、その文字を指でなぞった。

ゆっくりと進むその光を、美穂奈も同じ速度でゆっくりと後を追う。点字をなぞるかの様に、そつと。

どれくらいこうしてていたのかは分からない。

ただ、この追いかけっこもようやく終わりが見えてきた様だ。

最後の白いページ。

そこを、今までと同じように金色の文字は進み、埋めていく。

ゆっくりと、美穂奈が最後の一文字を撫でた瞬間、その光は大きく膨らみ…。

そして、弾けた。

## 少女と男

「どうしよう。」

やつてしまつた、と美穂奈は頭を抱えていた。

「いや、だつて急に出てくるから…。」

言い訳がましく咳いてから、美穂奈は辺りを見渡し、もう一度頭を抱えた。

木の温もりを感じられる簡素な小屋。

ついわつきました、自室にいたのに…、どうして?とか、そんな事よりも、だ。

美穂奈は目の前で倒れている男の人を見た。

この男の人が突然目の前に現れた、そう思つていたが、この状況。ここは美穂奈の部屋でも、美穂奈の家でも、もう一つ言えば、窓の外の景色からして、美穂奈の住んでいる街でもなさそうだ。考えるまでもなく、美穂奈が、突然現れたのだ。

この男ではなく、美穂奈が突然。なのに。

美穂奈は手の中にある、あの赤い本をギュッと握る。

急に見知らぬ男が出現したと勘違ひした美穂奈は、手近にある本で男を思いつきり殴り倒してしまつたのだ。死んではないだろうが、何千ページもある分厚い本の、角。しかも、金の飾り縁のところで、本の重みに従い腕を振り下ろし殴つてしまつた。

しばらくは目覚めそうにない。

美穂奈は一瞬の間の後、男に手を合わせた。

「ごめんなさい。」

一度、しつかりと頭を下げるから、美穂奈は改めて男を見る。

「…変わった色。」

灰緑の髪に、美穂奈は小さく咳いた。

そういうえば、一瞬しか見ていないが、今は閉じられている瞳も同じ色だった気がする。

「ふあ……。」

美穂奈は大きくあくびを一つ漏らす。

何だか無性に眠たい。

思いつ切り運動した後の様な気怠さが、睡魔を連れてやってくる。美穂奈はそれを追い払うように一度頭を振り、これから的事を考えた。

まずは、この人が目を覚ましたら謝つて、それからここがどこなのかを聞こう。

で、場所が分かつたら、家に連絡してかえ…。

そこまで考え、美穂奈は首を傾げた。

帰つて、どうするんだろう。

眠たく、重い頭で考える。

帰つたつて待つてるのは、つまらない婚約者様と、恩は感じていても本当の親だとは思えない義両親。

つまらない結婚生活に、終わつたも同然の人生。

帰つて、どうするの？

どうすれば良いの？

眠いせいだらうか、頭がしつかりと働かない。

少し、眠つた方が良いのかもしれない。

眠れば、少しは、マシな打開策が見つかるかもし�れない。

美穂奈はそう結論付けると、体を小さく丸め、そのまま床の上に体を預けたのだった。

「どうしよう。」

何が起きたんだ、とラズは頭を抱えていた。

「急に殴られて、えっと…。」

気絶する前の事をゆっくりと思い出しながら、ラズは床で丸くなつて寝ている少女を見て、もう一度頭を抱えた。すやすやと安らかな寝息を立てて眠つてている少女。

ついさっきまで、本を読んでいた。

長年かけて解読し読み解いていた本を読み終えてしまい、達成感と明日から何をしたら良いんだろうといつも虚無感に胸の中が絹い交ぜになつて…とかそんな事よりも、だ。

ラズは、田の前ですやすやと気持ちよさうに寝こけている少女を見た。

突然目の前に現れた見知らぬ少女。

その子は、ラズに何か言つでもなく、聞くでもなく、いきなり殴つてきた。

何か固くて重い物で。

相手を気絶させ、その後に家の中を漁り金田の物を盗んでいくなら強盗だ。

気絶させ、トドメをさせば、快楽殺人者が殺し屋かもしない。が、相手を殴つて気絶させた後に、その場で丸まつて寝てしまうのは、いったい何だ？

それは、ラズが知る知識を総動員させても、何にも属さない、意味不明な行動であつた。

ラズは首を傾げた。

「何がしたかったのかな？」

呴いてから、ラズは改めて少女を見る。

ふわふわとウエーブのかかった茶色の髪が、床に散つていて。床の木の色と良く似ているから、踏まないようになければ。年々度が合わなくなつてきている眼鏡を押し上げ、そう思ったラズ

は、ズキリと痛む頭に一瞬眉をしかめた。

：「 そういうや、何か固く重い物で気絶する程殴られたのだった。  
忘れていた訳ではないが、目の前で眠るこの少女のせいで考える暇  
がなかつた。

一体、何で殴られたのだろう？

少女の腕は細く、大きな武器を振り回したりは出来ないだろう。  
それに、そんなものを隠す場所もないし。

この小屋に、何かを隠せるだけのスペースも死角もないのは、小屋  
の持ち主であるラズが一番知り尽くしている。

だとすると、少女が持てるだけの大きさ…あ、もしかしてこれが？  
ラズは、少女が大事そうに抱えている本を見た。

長年、自分が読み解いていた、緑の革表紙に金の飾り縁が施してあ  
る、あの分厚い本。

「 そつ か、あれで殴られたのか。そりや、あれだけ分厚い本で殴ら  
れたら氣絶ぐら い…あれ？」

そこでラズは何か違和感を感じる。  
少女が抱きかかえている本。

それは、たしかに自分が毎日毎日見てきた本なのに、何かが違う。

「あ…、色…。」

呴いて、確信する。

そう、ラズの知つてゐる本は、緑の革表紙に、金の飾り縁。  
だが、少女が抱えている本は、赤い革表紙に、金の飾り縁。  
色が、違うのだ。

「 だとすると、やつぱり中身も違うのかな？」

ラズは、そつと少女へと手を伸ばす。

その、赤い本の中身が知りたくて。

やはり、あの緑の本の様に、パツと見は、ただの白紙の本なのだろ  
うかと。

指先に、本が当たる。

そつと撫でれば、ザラリとした革の感触。

緑の革表紙と同じ感触だった。

瞬間、少女の瞳がゆっくりと開いた。

髪と同じ、濃い茶の瞳がこちらに向けられ、ラズをとらえた。

あ、ヤバイ。

ラズが咄嗟にそう思ったときには既に遅かった。

「キャーッ！」

少女は先程と違い、そう叫んだ後、ラズの頬にあの赤い本を叩きつけたのだった。

## 疑いと自己紹介

「大変、申し訳ございました。」

美穂奈は勢い良く頭を下げる。

目の前には、赤く腫れ上がった頬を押さえている男。美穂奈が放った2発目は、不幸中の幸いというのか、表紙の部分が頬に当たった為、男は気絶せずに生きている。生きてはいるが、機嫌は最悪であった。

それはそうだろうと美穂奈は思つ。

もし自分が逆の立場であつた場合、美穂奈の機嫌も最高潮に悪いだろ？から、このなんとも言えない微妙な空気には納得している。が、この状況については何一つとして、納得も理解もしていなかつた。

なので、唯一の情報源である彼がこの状態では、美穂奈もお手上げである。

早く機嫌を直してはくれないだろうか。  
そんな希望の元、頭を下げたまま、チラリと男を盗み見る。  
目を覚ました彼の目は、やはり髪と同じ灰緑色だった。  
日本人にあるまじき不思議な色。

「…………で？」

ビクリ、と、美穂奈は肩を揺らした。

ずっと無言で怒っていた目の前の男が、口を開いたのだ。

「え？」

美穂奈は顔を上げて、首を傾げた。

何を聞かれているのか、わからなかつたからだ。

「君は一体、何がしたいの？」

「……はあ？」

問われた言葉に、美穂奈は盛大に首を傾げた。  
何がしたいって……。

美穂奈が理解出来ず、呆然としているのを横目に、男は続けた。

「あいにくと、この家には価値のある様な物はないよ。それに、僕は特に恨まれる様な事をした覚えもない。」

「…………はあ。」

美穂奈はとりあえず頷く。

たしかに、この小屋は簡素で、パツと見、価値の有りそうな物はない。そしてこの男も、誰かに恨みを買つたつ感じには見えなかつたからだ。

「君の目的が何かは分からぬが、とにかく、人の家の床で寝るのはどうかと思う。…出ていってくれ。」

言つて、出口であろう扉を指さす男に、美穂奈は首を振る。

「あの、たしかに、いきなり殴つたり、勝手に寝てしまつたりしたのは謝るわ。でも、私の話も聞いて？」

ここがどこかとも、何故ここにいるのかもわからない状態で外に放り出される訳にはいかない。

美穂奈は必死で男に頼み込んだ。

「私、ここがどこかも、いつの間にこんなところにいたのかもわからぬのよ。本当よ？突然家の中に上がり込んだりして、あなたの気分を害したのは謝るから、少しだけお話をしてくれない？」

「…………」がどこかもわからない？何、君、記憶喪失とかでも言つの？

驚いたように聞いてくる男の言葉に、美穂奈は首をふるふると振つて答えた。

「違うの、そうじゃないの。名前だつてちやんと言えるもの。私は美穂奈よ。美穂奈…、えつと…。」

そこで口を噤み、美穂奈は一度何かを考えるように視線を彷徨わせた後、男を見て困つた様に笑つた。

「だからね、その…。あなたの名前も教えてもらえると助かるのだけれども。」

ちょっと苦しい繋ぎだつたかしら。

そういう思いながらも、美穂奈は男から聞き出した情報を頭の中で反芻する。

男の名前は、ラズ＝サブレーン。

美穂奈よりも7つ年上の23歳。

ここは彼の家で、都心部から少し離れた森の中にあるらしい。婚約者との結婚に逃げ出した形になつていて、自分が、あの家の姓を名乗つて良いのか、咄嗟にそう思い言葉が出てこなかつた美穂奈は、苦し紛れに男の名前を聞いた。

元々聞くつもりではいたが、もつ少しきちんと自己紹介をし、美穂奈の事を知つてもらつた上で聞くつもりだつた。

出会い頭いきなり殴つて、こつちの印象は最悪だつから、少しでも印象が良くなるようにと考えていたのに…。

だが、美穂奈のあんな無礼な聞き方に、男は更に怒つたりなどはせず、小さく溜息を吐いた後、上記の事を教えてくれた。

ほとんど単語のみの受け答えだつたけど、ちゃんと答えてくれるあたり、良い人なのかもしねれない。

「あ、えつと。ラズさん。」

「ラズで良い。僕も、ミホナつて呼ぶから。」

年上を呼び捨てにするのはどうなのだろうとは思うが、本人がそう言つのなら出来るだけ要望には応えよう。

「じゃあ、ラズ。」

「何?」

美穂奈の問いに、ぶすつとしながらも答えてくれるラズは、やはり

優しいと思う。

「ラズの髪と瞳って、とても珍しい色ね。何人なの？」  
美穂奈がそう問えば、ラズは一瞬不思議そうな顔をした後、すぐに眉をしかめ首を傾げた。

「何人？… オーラー出身だけど？」

「オーラー？」

今度は美穂菜が首を傾げる番だ。

聞いたことない地名だ。

元よりそんなに地名に詳しい訳ではないけども。

日本国内の地名だって、全部わかる訳ではないのだし。

「えつと、それはどこかしら？ アメリカ？ イギリス？ ロシア？」

「アメリカ？ イギリス？ ロシア…？ ミホナ、君が何を言つているのかわからないんだけど？」

「え…？」

不思議そうなラズの顔に、美穂奈も同じ顔で返した。  
今、美穂奈は比較的有名な国名を口にしたつもりだ。  
なのに、何故ラズは知らないのか。

「ここは、日本……、ううん。地球よね？」

当たり前だと思いながらも、美穂奈は聞いた。

ラズは美穂奈の問いに、何当たり前の事を聞いてるんだって笑つてくれれば良い。

なのに。

「チキユウ？… ミホナ、君が何を聞きたいのかは分からぬけど。  
ここは『<sup>カラーズ</sup> C O L O R S』の中心とも言われているオーラー都市の外  
にある森の小屋の中、だよ。」

「カラー…ズ？」

ラズの言葉に、美穂奈ただ呆然と呟く。  
カラーズ  
C O L O R S。

それが、この世界の名前。  
この世界…。

そう、私の知つて いる世界とは違う、別の世界。  
異世界の、名前なのだと、それを理解するのに、私は、少しの時間  
を要した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5970y/>

---

colors

2011年11月27日15時50分発行